

La Lettre

— DE LA FONDATION FRANCO-JAPONAISE SASAKAWA/Bureau de Tokyo —



笹川日仏財団
ニュースレター
Vol. 2 No.1

河出書房新社刊
『めず豚ものがたり』



フランスの人気作家、東京に集う

東京湾に臨む近未来都市を思わせる
巨大な東京ビックサイトで一月三日
から三日間《東京国際ブックフェア》が
開催された。

各国のブースの中で一際目立つフ
ランスは「日本におけるフランス年」とい
うこともあり、特設会場を設けて参加
歴史、美術史、哲学、文学などの分野
で活躍する十名がフランスから特別
招待、講演やシンポジウムが開かれ、
さかんな意見交換の場が持たれた。
(主催/社)日本書籍出版協会・フラン
ス出版文化紹介実行委員会)

特設会場では特にサガンの『悲しみよ、
こんにちは』以来の人気で、一大旋風
を巻き起こしたマリー・ダリュセック
(処女作邦訳『めず豚ものがたり』河出
書房新社刊)と松浦理英子との対談
が行なわれ人気を集めていた。また
『浴室』でデビュー、映画監督としても
活躍する作家のジャン・フィリップ・
トゥーサンと藤原智美との鼎談が行

日本文化の アイデンティティを めぐって

なわれ、文学にとどまらない内容に
会場は熱気で溢れた。

また五百人は優に入る会議場では
「フランスからみた日本文化の現在」と
題し、近現代史の分野で活躍する美術
史家フランソワズ・ルヴァイアンと禅や



フランスパビリオン内に設置された会場での講演会。
写真中央がイラストレーターのコ克蘭さん。

仏教に深い関心を寄せ
る作家のオリヴィエ・
ジェルマン・トマの
二人に詩人の大岡信、
美術評論家、高階秀爾
ら加わり二時間にわ
たって、熱い意見交換
がなされた。

ルヴァイアンさんは、
中国と混同されていた
日本文化の独自性を認
め始めたフランスの現
状を説明。その上で現
代作曲家、細川俊夫な
どの名前をあげて聴覚
による新しい感性を呼



「日本人の原点に
立ち戻って欲しい」
と熱く語るジェル
マン・トマさん。

さんは、古代日本人の自然崇拜の精神
こそ二十一世紀の哲学になりつると
提言。明治以降、西洋文化を求めて
きた日本人は、再度原点に立ち戻り、
自分たちのアイデンティティを捜して
ほしいと語りかけた。

これらに対して、特に日本人のアイ
デンティティ喪失を富士山に例えた
大岡氏。「今や富士山は信仰から観光の
対象になって五合目までがゴミの山。
私たちが自ら、アイデンティティを
捨てている」と言及。「隠す文化を持
つ私たちは、それを伝える手段を捜さ
なければならぬ時代に入った」と
高階氏も語り、会場のさかんな拍手を
受けていた。

このように出版を通して両国を知る
機会となったが、そこから
ほの見えてくるフランス人
の本質を探ろうとする精神
は、日本人が今最も必要と
している精神かもしれない。



21世紀への インスピレーション

当財団の助成事業の一つ『フランス・ダンスの100年』は、一月九日〜二三日までの五日間、横浜ランドマークホールで開催。シネマテーク・ド・ラ・ダンス秘蔵の映像とレクチャーで、今世紀の幕開けから現代までの伝説の舞台を一挙に上映した。映像を通じて21世紀のダンスの可能性を探ることができた。

そこで今回は散漫な通史になることを避け、あえて時代を区切り、ディアギレフ率いる

ロシア・バレエ団（バレエ・リュウ）がパリで興行を行なった一九〇九年以降、大きくバレエの歴史を塗り替えた二十世

紀に焦点を当てて企画された。これは世紀末にふさわしい内容だったと観客の評価は高かった。

特に「このチャンスを見逃すと二度と見れない珍しいものばかり」と、貴重な映像に観客は大喜び。五日間という限られた期間に対して、長期にわたる開催やダンスライブラリーを望むなど数多くの声があがった。逆にこれは、日本でのダンス情報機関の少なさを如実に表したともいえる。

フランスダンスと一口に言っても、五百年に及ぶバレエダンスの王道を歩んできたのがフランス。

『フランス・ダンスの100年』の会期中には、例年になく大雪に見舞われた日もあったが、観客数は延べ一六五二人。二十代から三十代の〇しに圧倒的だったが、五十代以降の観客数も多く、年令的な幅を見せていた。それも関東近県から仕事を休んで連日にわたって足を運んだり、名古屋から泊りがけで来るなど改めてファンの熱心さを痛感させられるフェスティバルとなった。

特に「このチャンスを見逃すと二度と見れない珍しいものばかり」と、貴重な映像に観客は大喜び。五日間という限られた期間に対して、長期にわたる開催やダンスライブラリーを望むなど数多くの声があがった。逆にこれは、日本でのダンス情報機関の少なさを如実に表したともいえる。

初演の夜、客席の大半を占めたのは上流階級の人々。ロシアの民謡的な心地よい音楽を期待していた耳に、突然因習を打破するようなストラヴィンスキーの音楽が鳴り響いた。客席は騒然。しかしその中で、「ディアギレフは自ら劇場の明かりを点滅して客席を煽り、ニジンスキーは椅子の上で大声で踊り手ごころを封じていた」とい

うんですからすごいですよ。ディアギレフは天才興行師ですよ。笑」と企画者の一人、日本大学芸術学部講師の松澤慶信さん。

《春の祭典》は《春の虐殺》と酷評された。しかしその喝采と怒号の入り乱れた歓声がやがてヨーロッパに一大バレエ・ブームを起こしていく。それはまさにもう一つのロシア革命だったのである。

バレエ・リュウスの成功でディアギレフはバレエを音楽、ダンス、美術、衣装の総合芸術と捉え若き芸術家を次々と起用。ピカソ、ミロ、エルンスト、サティ、バランシン、マシソン、またシャネルに至るまであらゆる分野の才能を結集。世紀を代表する芸術家を育てていったのだ。まさに芸術の都

パリの二十世紀の始まりは興奮の増埒だったことを映像を通して知るこころが出来る。

パリ・オペラ座の機構改革を成し遂げ、隆盛時代を築きあげたリファール。ジョセフィン・ペーカーと。



日本で未知の戦後のダンス

ディアギレフ亡き後の戦後は、日本でも多くのファンを持つベジヤールやプティが活躍する。会場でも《ボレロ》などが上映された。しかし一方で、今回の企画のポイント、日本に知られていない戦後のフランス・ダンスにも焦点を当てたことにあると、企画者でメディア・プランナー関口紘一さんは説明する。

「ベジヤールばかりでなく、同様に忘れてならないのは、実はパリオペラ座のディレクターとなりオペラ座を機構的にも改革したセルジュ・リファールだったんです。舞踊史上で重要な存在でありながら、日本では未知となっていた空白部分を埋める意味をこめて企画しました。」



20世紀初頭、ディアギレフは古典バレエの革命を行った。写真は《薔薇の精》のカルサヴィナとニジンスキー。

自分をコントロールできなくさせたとまでコクトーに言わせたりファールのダンス。ベルサイユ宮殿で踊った野性的な《牧神の午後》や代表作《白の組曲》のほかりファール自身が登場するドキュメンタリーも上映され、会場ではリファールに新たな熱い視線が注がれていた。

パリを彩ったエトワールたち

さらに今回のフェスティバルで、最も注目に値するのはパリを彩ったエトワール（トップダンサー）たちを集めた映像である。

「日本では現在シルビエ・ギエムばかりが騒がれていますが、それ以前の連続と続くエトワールたちを見て頂きたかった。彼女たちがいたからこそギエムが今日あるのです。六十年代のクレール・モット、それこそギエムに手ほどきをしたイヴェット・シヨヴィレたちの素晴らしいこと」

ギレーヌ・テスマー、ジャン・バビレなどなど関口さんの口からは次々とエトワールの名前が飛び出した。

エトワールが発表されると一般紙は冒頭を飾る。フランスでは社会的なトピックになるほどの地位を持つのである。「国民的スター」ともいえる彼らを通してダンスがいかに偉大であるかを知って頂きたい」と強調した。かつての

エトワールたちの映像は、驚くほどの技術がありながら、それを一切感じさせない表現にあふれている。技術のみが注目されがちな現代のダンスの限界を無言で教えてくれているようだ。それこそ本物の持つ迫力なのだろう。

「アンドレ・ジイドはダンスを『神から来たもの』と言いましたが、ダンスは言葉で説明できるものではありません。偉大な芸術家は皆、正確な技術の背景に深遠な魂の神秘性を合わせ持っています」

ダンスの本質は、これらの映像がすべてを物語っている。とシネマテーク・ド・ラ・ダンス・ディレクターのパトリック・バンサルさんも語った。

コンテンポラリー

ダンスでも世界をリード

世紀末を迎えた現代、最終日は八十年代に花開いたヌーベル・ダンスが中心となった。それはベジャールやプティなどバレエを基調にしたものとは袂を分かちムーブメント。アメリカのモダン・ダンスやポスト・モダン・ダンス、日本の舞踏、また武道に基づく儀式的精神など様々なダンスの潮流の影響を受けて広がりを見せた。何と云っても七八年のアンジエ現代舞踊振付センター（初の国立の学校）の開



1989年 アンジエラン・ブレルカーージュ振付《結婚》クラシックをコンテンポラリーのように扱った。

校や、パニヨレ国際振付家コンクールが開催されたことで一気に花開いたといえる。それは百年のバレエ史を十年で駆け抜けたとまでいう人がいるほどだ。パニヨレでは今までの常識を覆す作品を生み出す新進振付家が続々と登場。コンテンポラリー・

フランスは常に輩出してきました」マギー・マラン、ジャンクロード・ガロツタ、アンジエラン・ブレルカーージュなど、エスプリの効いた映像が一気に上映され、観客の期待に応えていた。

その中でもバンサルさんのお薦めはジョゼ・モントアルポの《パラディ》。舞台

にスクリーンを張ってビデオを映し出し、ダンサーや動物の動きを同時に組み合わせる効果も「これなどダンスがしかつめ顔で観賞する高尚なものではなく、笑いを誘う可能性を示してくれた作品として今までにないものです。今やダンスは、新しいイマジネーションの世界を作り出す芸術としての実験の場。」

次の瞬間、何が飛び出すかわからない目の離せないものなのです」

そこに世界中を飛び回ってダンスフィルムに集まる醍醐味がある。とバンサルさんは言う。

映画が発表され、映像が残されるようになってからもうと百年。フランス・ダンスは映像と共に

変貌を遂げてきたともいえる。

しかしここ数年になって、ヌーベルダンスは一時期の勢いを失っているのも現実。フランス国内で国立舞踊センターは十八箇所に及び、舞踊教師の国家免許は五年前に誕生と、ハード面では充実している。しかしディアギレフやベジャールに代わる人材は果してどこにいるのか。この不透明感漂うときには、今世紀の光芒を振り返ることは意味深い。ディアギレフがパリに登場した今世紀最初の息遣いをもう一度知ることで、次の世紀に繋がるインスピレーションを与えられたような気がする。

シネマテーク・ド・ラ・ダンス

パリにあるシネマテーク・ド・ラ・ダンスは、トリュフォーなどが通って映画の勉強をしたといわれる世界の映画フィルム蒐集機関のシネマテーク・フランセーズから一九八二年に独立して出来上がった。ダンスを中心にリュミエールなどによるシネマ最初期のものから現代まで世界中のフィルムを所蔵。各国のフェスティバルなどに積極的に貸出しを行なう傍ら、上映会もさかん。ニューヨークなどにもこのような機関はあるが、特に散逸する過去の映像を集めて整理し作品にしているのが特徴。舞踊史に名を残す振付家やダンサーのドキュメンタリーなどを多数手掛けてダンス界に貢献している。

Petite note

編集後記

いろいろな方々のご協力を得て
今回も無事に発行することが
できました。慣れない編集の
仕事ですが、今年も4回の発行を
目指し、さらに内容の充実を
図っていかうと思えます。皆さまの
ご意見をお待ちしています。

(M)

笹川日仏財団ニュースレター

La Lettre

1998年3月発行 Vol. 2 No. 1
 発行人：富永 重厚
 編集人：横山 道雄
 発行：笹川日仏財団
 〒108-0073 東京都港区三田3-12-12
 TEL：03 (3769) 6252
 FAX：03 (3769) 2090
 E-mail：matsugam@spf.or.jp

A la carte

ア・ラ・カルト

フランスのイラスト事情

四年前、パトリス・ルコ
ント監督の映画『タンゴ』
のポスターで国際ポスター
グランプリを受賞したのが
イラストレーター、リオネル・



紀伊國屋書店刊
『イヌとネコの生活事情』



さらに企業の商品カタログにも
イラストを多用して企業広
告に成功しているのがフラ
ンス。持参されたシャネル
のカタログは、まるで絵本
のよう。ペー
ジを開ければ
飛び出す立体的なものまで
あり、実物を
手にした会場
の女性から
は、思わずカ
ワイイ！とい
う歓声があがった。このカタログは
フランスでも人気でファッショ
ンジャーナリストたちの間ではコレ
クターがいるというのも頷ける。

日本に比べてイラストの地位が
高いフランス。それはイラスト
レーターによる地道な努力があっ
てのこととコ克蘭さん。ローマ
は一日にしてならず」と笑った。

A propos de nos projets...

最近の事業から

日仏パネ ル ディスカッ ション

生活を通して見る日仏
教育事情の展望
於日仏会館



今や国際時代。親の仕事
の都合上、帰国子女となっ
た子供は増える一方である。
その中で子供たちの教育を
どう考えていくのか。
子供が学齢期に海外
へ行かざるを得ない
親は重要な選択を強
いられる。そこで商社マン
や大学教員など日仏両国の
滞在経験のあるパネリスト
と共に、両国の教育事情を
知ろうというディス
カッションが二月二六日、
パルククラブ
と日仏協会
の主催で行
なわれた。

百人程度
入る席はフ
ランス人が
約四分の一
を占めて、
ほぼ満席。
教育の問題
が噴出している今、会場は和やか
な中にも両国を知ろうという熱
気と時間が足りないほどだった。
やはり言葉の問題が話題の中
心になった。母国語をきちんと
持った上で外国語を勉強させた
方がよいのではないか。日本に

いる以上、子供には日本語を母
国語として学ばせているという
フランス人の意見を皮切りに、
今の子供世代では二つの母国語
も可能なのではないだろうか。
いや、私の子供は英語も含めて
三ヶ国の言葉を使い分けている
など、両国から実体験を踏まえ
た悩みや経験談が飛びかっ
た。そして言葉は単なる道具では
なく文化そのもの。子供の
発想を形づく
っていくと議
論は発展。現
在英語が世界
共通語として
浸透しつつあ
るが、単一を
めざすのでは
なく様々な言
葉こそ大切。
言葉を通して
知る文化の違いの楽しさを親が
まず持っていたい。日仏両国は
共通の意識や文化を持っている。
その意味からいえば、両国
の言葉は非常に奥の深い言葉で
あると結んだ。

フランスでの長い生活経験を
持つ今回のディスカッションの
司会者で学習院大学教授小林善
彦氏は最後にこんな風に飾った。
「たとえビジネスでも、お互い
を人間として親しくすることが
必要です。そのとき言葉は単
なる道具以上の意味を持ってい
ます。次世代の子供たちはす

に私たち以上に深く異文化に触れる
という無形の文化を手に入れ始め
ました。フランス語を学ぶことで、
さらにお互いに興味ある国として
豊かな視野を持つよう見守ってい
たいです」
言葉の障壁を乗り越えて、真の
コミュニケーションを持ち得る世代
の出現なのである。

プロジェクト・カレンダー

98年4月～6月

- 4月2日
《日本に関する講演会》
- 《日仏における学術研究 パイオセンサ》
パリ本部主催事業 / 於同本部
- 4月15日～5月15日
《マリー・ノエル・ド・ラ・
ボワップ作品展》
- 《クジラの骨などで創る芸術》
同アーティスト / 於東京芸術専門学校
- 4月29日～30日
《トーク》講演会とスピーチコンテスト
日仏の高等教育、企業との関係の相違、
トゥール高等商業大学 / 於同大学
- 5月26日～30日
《「天守物語」パリ公演》
渡邊守章氏が演出する泉鏡花の世界、
空中庭園 / 於パリ日本文化会館
- 5月22日～6月3日
《日本 フランスパフォーミング・アート交流展》
日本とフランスの最先端芸術が出会う
《日仏美術委員会 / 於パルク・現代芸術センター》
- 6月
《日仏パネルディスカッション》
日仏の経済・技術交流、制度比較と雇
パルククラブ / 於日仏会館